



# 平成31年度 自衛官候補生入隊式



若葉芽吹く春

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成31年4月7日、秋田駐屯地において、「平成31年度自衛官候補生入隊式」を実施した。

真新しい制服に身を包み、初々しい姿の26名の自衛官候補生は、多数の来賓及び家族が見守る中、澗刺と国歌を斉唱した後、全員が候補生として、任命された。

続いて候補生を代表し藤原麻貴候補生が入隊を申告し、奥山海斗候補生が「自衛官候補生として名誉と責任を自覚し、知識及び技能の修得に励む」と力強く宣誓した。

執行者の荒巻連隊長は式辞において、「我が国の平和と独立を守るという崇高な使命を持つ自衛官としての道を自ら志願したことに対し、大変うれしく、また心強く思う」と述べるとともに、「使命感を持って」「自らを鍛え、仲間意識を持って」の2点を要望し、「本教育の3ヶ月間において、自衛官として、立派な社会人として成長できるよう、しっかり修養してもらいたい」と激励した。

式典終了後、各区隊毎の記念撮影においては、カメラマンの後方に多数の家族が集まり、候補生の晴れ姿を写真に収めるとともに、約一週間振りに家族と対面し笑顔で談笑する姿が見られた。また、その後の記念会食においては、入隊式前日までに撮影された候補生達の生活の様子をスライドで紹介を受けつつ会食し、各テーブルにおいて候補生たちは、家族へ近況を伝えるなど、終始和やかな雰囲気が入隊式行事が行なわれた。





# 防衛・駐屯地モニター 終了・委嘱式



## 縁あれば千里

秋田駐屯地（司令 荒巻1佐）は、平成31年4月12日、秋田駐屯地において、防衛・駐屯地モニター終了・委嘱式を実施した。

防衛モニター並びに駐屯地モニターとは、自衛隊ひいては秋田駐屯地の活動に関して、駐屯地周辺に居住する方々の意見・要望などを伺い、今後の諸施策の資とするとともに、駐屯地と地域社会との一体化を図ることを目的に委嘱されている。

当日は、モニターを終了される方の終了式と本年度よりモニターに就任される方の委嘱式が行われた。荒巻司令は「モニターの皆様のご意見は部隊として非常に貴重なものです。今まで頂いたものは随時反映いたします。これからも数多くのご意見をお寄せ頂ければ幸いです」と挨拶し、尽力頂いた方々へ感謝を述べると共に、就任される方々へ、駐屯地司令としての切なる願いを託した。

終了・委嘱式後は記念会食が行われ、モニター活動を回顧される方や初めて足を踏み入れたモニター活動への期待を膨らませる方、新旧モニター同士での情報交換が活発に行われ、荒巻司令を挟んで終始和やかに進んだ。

その後新モニターの方3名は部隊見学を実施した。特に史料館では様々な展示物に興味津々の様子であった。

「（自分に出来ることは未知数だが）少しでもお力になれば」と語っていた新モニターの田村卓さんは、以前教職に就かれていたことがあり、本式典に参加していた隊員の中に2名の教え子を見つけると、驚きと共に懐かしさと再開の嬉しさをかみ締め、喜びを露わにした。

新年度・新年号へと新たに舵を切る秋田駐屯地は、合縁奇縁、多くの地縁に支えられ、地域と共に更なる発展を願い、終了・委嘱式を終えた。





# # 1 野営



## 啓蟄のサジタリウス

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成31年4月17日、岩手山演習場において、第1次野営を実施した。

本野営は、小銃や迫撃砲の射撃練度の向上を図る射撃野営として計画されるとともに、各中隊計画の練成訓練が実施された。

まだまだ冠雪の岩手山からの山おろしの寒風が吹く中、戦闘射場を広く活用した各種戦闘射撃、指向性散弾や手榴弾投擲等の爆破訓練、昼間に引き続き夜間における迫撃砲実射訓練等、多岐にわたる訓練は確実に隊員たちの練度を向上させた。

また、各中隊は今後の部隊の現状を踏まえ部隊練度の向上や訓練検閲の完遂を目標に練成訓練を行い、防御訓練や行進訓練等を寸暇を惜しんで行っていた。

6日間に及んだ第1次野営は、新年度の始まりを象徴するような、勢いと活気に満ちた中で訓練成果を得て終了した。





# # 1 野営 夜間射撃



## 鈴なる月光、顕現する陽光

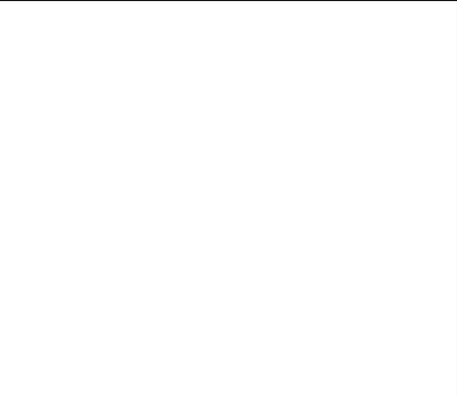
第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、平成31年4月18日及び19日、岩手山演習場において、81mm迫撃砲による夜間射撃を実施した。

夜の帳も下りて、一段と冷え込んだ頃、各砲手たちは射撃号令を待っていた。81mm迫撃砲による夜間射撃は、17日から22日の間で実施された第1次野営の中において、各中隊の迫撃砲小隊が二夜に渡って行われた。それぞれの夜、第3中隊と第4中隊が協同し、一方の中隊が照明弾を打ち上げ、もう1コ中隊がその光源を元に観測し、交互に射撃を実施した。

隊員達は、暗闇の中にあっても、通常より光が秘匿される赤いライトのみを頼りに正確・安全・確実な動作を徹底し、昼間と変わらぬ練度と安全性を保った。

照明弾が打ち上がるたびに、満月が二つ三つと増えて行くような錯覚を覚え、その度に砲弾を発射する砲口は、地上に太陽が出現したかの如く辺り一帯を照らし尽くした。

暗闇と寒さを克服した夜間射撃訓練は、連隊における81mm迫撃砲練度を確実に向上させ、終始安全を保ち終了した。





# 曹友会 ミニバス



## コートを駆ける青春

秋田駐屯地曹友会（会長・畠山実曹長）は、秋田駐屯地において5月4日（土）第20回 秋田駐屯地曹友会長杯 秋田市北部地区女子ミニバスケットボール大会（杉山カップ）を開催した。

秋田駐屯地の所在する秋田市北部地区の小学校8校から応募があり、各チームは所狭しと体育館を駆け巡り熱戦を繰り広げた。また、子供たちの活躍を一目見ようと、多くのご家族も応援に駆けつけ、熱い声援を送った。優勝は接戦を制した飯島小チームで2連覇を果たした。序盤から点の取り合いとなった決勝戦において、飯島小チームは最大8点もあった点差をじわじわと縮め、同点に追いつき、延長に望みを繋いだ。続く延長戦3分間は1点を競い合うシーソーゲームとなり、応援者も手に汗握る展開となった。そして残り2秒で、ファウルからのフリースローが決勝点となり、終了のブザーが鳴った瞬間は、体育館が破裂せんばかりの歓声に包まれた。

大会を見届けた畠山会長は「とても白熱した大会になって嬉しい。来年も皆さんの活躍を見せてもらいたい」と今大会の感想を述べ、地域交流の未来に思いを馳せた。

選手・ご家族共々の熱気に包まれた体育館には、一日中賑やかな歓声が響き渡り、笑顔溢れる大会となった。





# 春季統一整備



## 伝統と革新のかすがい

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、令和元年5月7日から14日までの間、岩手山演習場において、令和元年度岩手山演習場春季統一整備を実施した。

連隊は、各種訓練施設を整備し演習場機能の維持・向上に寄与することを目的とし、全隊員一丸となって整備に臨んだ。

月初に新年号を迎え最初の連隊の任務として訪れた本整備は、昭和より継続してきた訓練地域の整備であり、平成に計画された訓練地域の拡張等を継承するとともに、この演習場を未来へと継ぐため、隊員たちは各々の道具を手に取り、作業地域へと足を踏み出した。

整備期間中は連日青天に恵まれ、隊員たちのやる気も相まって、演習場内は熱気に包まれた。機材を匠に操り伐採するもの、指揮・安全管理を監督するもの、資器材の整備に従事するもの等、それぞれの任務を確実に遂行し、整備完遂へ邁進した。

また、実際的な訓練環境の整備に留まらず、隊務の総合一体化の絶好の機会と捉え、任務遂行能力向上及び隊員の心情把握の場として活用した。各中隊の合同炊事による野外給食、当直等の特別勤務による服務規律の維持や装備品等の保全に係わる業務を実施し、より効果的な宿営地の設営・運営に心がけた。

そんな中、10日には第9音楽隊の巡回音楽コンサートの慰労を受け、疲れを癒し音楽を通し、全隊員が一体となって楽しむ瞬間もあった。

最後は達成感に溢れる隊員たちの笑顔とともに完遂し、7日間に及んだ整備は、より良い未来の演習場につながる「かすがい」となった。





# 春季統一整備 2DS



## 支え援ける矜持

第9後方支援連隊 第2整備大隊 第2普通科直接支援中隊（中隊長 柴田3佐）は、令和元年5月7日から14日までの間、岩手山演習場において、第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）が参加した、令和元年度岩手山演習場春季統一整備を支援した。

中隊は本整備間、普通科隊員と宿営地を同じくし、連隊の各種資器材の整備支援を行った。

隊員たちは、平素の演習等であっても、深夜でも悪天候であっても、部隊の装備品の不具合に対し、迅速に駆けつけることが任務であり、部隊が前進する際は、車両の不測事態に即応する為、必ず連隊の最後尾を追従し、あらゆる状況に備えている。

真夜中に至急の依頼で駆けつけた時も、帰来する際に依頼した隊員が感謝を述べると、彼らは辛さを微塵も見せず「これが私たちの任務ですから、何時でも呼んでください」と笑顔で答える。卓越した技能と確固たる矜持に支えられた、尊ぶべき一瞬である。

本整備間においては、僅か4名の編成で400名を超える隊員たちを、7日間に渡って支援し続けた。演習場での任務を完遂した中隊は、統一整備の終了に伴い帰隊する連隊を、再び最後尾から追従すべく見送った。





# 県民防災の日



## 秋田における存在感

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、令和元年5月24日（金）秋田県庁第二庁舎で実施された「県民防災の日」に参加した。

秋田県の県民防災の日は、昭和58年に発生した日本海中部地震の教訓から毎年実施されている。

本訓練は、秋田県沖を震源とするマグニチュード8.7の地震が発生し、男鹿及び三種町が震度7、秋田市が震度6強並びに大津波警報発令という想定で実施された。

連隊からは、状況付与班として連隊本部の隊員と県庁連絡幹部等の上番中の第1中隊進藤治准尉と石川伸也2曹が参加し、実際の状況を想定して訓練を行った。

連隊は、秋田県で唯一の陸上自衛隊ということもあり、県対策本部内における信頼も厚く、訓練参加者は、連隊の派遣及び航空に関する調整等について関係機関及び部署との調整に奔走した。

連絡幹部として参加した隊員は、「本訓練に参加したことで、調整内容・場所・相手等を確認することができ、関係機関との連携要領を更に強化することができた」と話した。

連隊は、引き続き、何か起きた場合は直ちに行動できるよう準備していく。





# みなとブラスの響き



## 和になって奏でる

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、5月25日、秋田港地域振興センターセリオンプラザで開催された音楽演奏会「第17回みなとブラスの響き」に協力した。

秋田市北部地区の活性化を目的として、地域有志団体（みなと文化21会）が主催し行ってきた同行事も今年で17回目を数え、近隣に所在の將軍野・土崎・飯島各中学校、秋田中央高等学校の吹奏楽部と海上自衛隊大湊音楽隊・秋田駐屯地音楽隊の6団体が一同に会し、合同で演奏会を行った。

演奏会は、約800人の来場者をお迎えし、音楽隊と中高生の合同演奏で幕を開けた。その後各団体の単独演奏が行われ、各団体はそれぞれの特色を表現し、集団での壮大なハーモニーやソロ演奏で巧みな技術を披露した。中には観客席にまで乗り出し、来場者と一つになって歌い踊る団体もあった。

フィナーレでは再び合同演奏が行われ、約90人の演奏と約80人の合唱に加えて、来場者の皆さんと一緒に「ふるさと」「秋田県民歌」を歌い、4時間に及んだ演奏会は、多くの観客を魅了し拍手喝采の中、幕を閉じた。





# # 2 及び # 3 野営



## 将軍野協奏曲

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、令和元年5月15日から22日までの間に、岩手山演習場にて3コ中隊（第1中隊、第2中隊及び第3中隊）及び4コ直轄小隊（情報小隊、通信小隊、補給小隊及び衛生小隊）を、23日から6月1日までの間、弘前演習場にて2コ中隊（第4中隊、重迫撃砲中隊）及び施設作業小隊が、約40kmの徒步行進に引き続く防御及び実弾による戦闘射撃を受閲課目として、訓練検閲を実施した。

本訓練検閲は、秋田駐屯地において作戦準備の段階から状況が開始され、準備を終えた後、車両行進に移行し各演習場へ前進、そのまま約40kmの徒步行進を開始、行進終了後速やかに防御準備を実施して、防御戦闘に臨んだ。また、実弾を使用した戦闘射撃を実施し、部隊の総合的な戦闘能力を向上させた。

今回は、隣接部隊等が、受閲部隊であったため、より実際的な訓練検閲を実施できた。

講評において統裁官 荒巻1佐は隊員たちの労をねぎらうと共に「連隊検閲に向け、真に防御できる陣地構築に向け更なる努力を期待する」と本訓練検閲においてその実力を遺憾なく発揮した各部隊のさらなる躍進を願い、講評を述べ、訓練検閲は終了した。





# A B S 秋田放送取材



## 将軍野見聞録

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、令和元年5月27日、A B S 秋田放送の取材を受けた。

秋田では毎週金曜日に放送されている「エビス堂ゴールド」より、駐屯地の平素の暮らしや訓練を見学し県内の皆さんに紹介したい、と取材を依頼された。

快晴に恵まれた取材当日、初めての迷彩服に着替えたレポーターの酒井茉耶（まや）アナウンサーは、半長靴の見た目以上の重さに驚き、案内をした広報室の佐藤（孝）3曹に、しきりに服装について質問していた。

取材は楽しく談話しながら駐屯地を散策し、各訓練等を研修・見学した。

衛生小隊が実施していた救急法の訓練では、その圧倒的な速度に驚いていた。

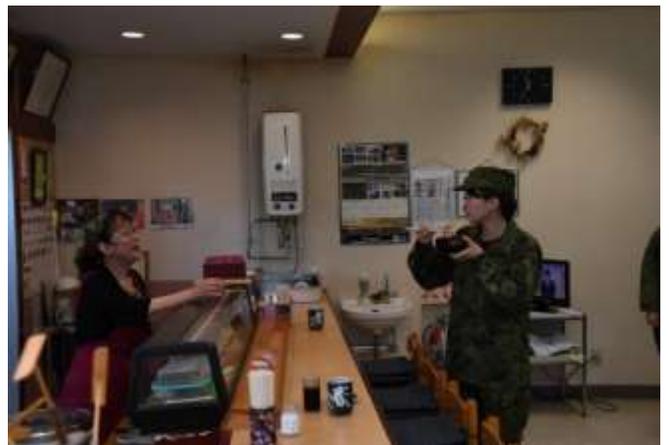
細部に至るまで細かく口に出して点検を行いつつ、迅速確実に実施する隊員たちの訓練に衝撃を受け、熱心に手順を教わっていた。

らっば手たちの練成訓練を見学した際は、実際にらっば吹奏に挑戦するも悪戦苦闘し、顔を真っ赤にしながら息を吹き込んでいる姿には、その場の皆が笑みをこぼしていた。

最後は秋田駐屯地が誇る、『米沢寿し』にて昼食を取りながら、ゆっくりとしたひと時を過ごした。取材中のアレコレを振り返りつつ、昼食に訪れた隊員たちと談笑し、名物の寿司を堪能してこの日の収録は終わった。

収録後、放送へ向け1週間前からCMが放送されると、らっば手の3中隊藤谷3曹の吹奏シーンが放映された。何日にもわたり何度もそのシーンが放映されると、その度に話題にされ、本人は照れ笑いを浮かべていた。

6月14日の放送が終わると、出演した各隊員たちへ友人知人から賛辞の連絡が後を絶たなかった。





# 警察学校部隊見学



## 他職種に学ぶ【守る】ということ

秋田駐屯地（駐屯地司令 荒巻1佐）は、令和元年6月13日～14日の間、秋田県警察学校初任科学生（62名）の教育課程に協力し、部隊見学を実施した。

部隊見学は、今年入校した初任科学生に対し公務員としての自覚の涵養を目的にこの時期に実施され、駐屯地が協力している。

駐屯地に到着した学生たちは、広報室長（大高2尉）からの陸上自衛隊の概要説明を受けた後、各種訓練や施設の見学をした。営内居室の見学をした際は、多くの学生が整頓の行き届いた部屋、その統制による効率の良さ及び物品管理の細かさを目の当たりにして、一様に驚嘆していた。特にそれを実現させている教官・助教たちの指導に興味を抱き、どのような指導が行われているかについて多くの学生が質問していた。

その後、厚生センター内の、売店等を見学。例年は自衛隊で販売している靴墨が人気だが、今年は訓練用品等が人気で、特に普段使いできるバッグやトレーニング用のインナー等を購入する学生が多く見受けられた。

見学を終えた初任科学生の藤原泉 巡査は「自分たちも普段厳しい訓練を重ねていますが、自衛隊の皆さんの訓練はそれ以上に厳しいように感じました。（秋田県警所属の自分は）普段【県民のため】にと教育を受けますが、同じ県にありながら【国民のため】にと活動する自衛隊の皆さんの生の姿を見て、改めて警察官としての志を考えさせられました。もっと広い視野で志を持ち、大きな志の中において県民の皆様に尽くしたいと強く感じました」と今回の部隊見学において、自己の信念について強く感慨を受けられていた。

二日に渡った部隊見学は、それぞれの学生たちの心に、強固な自覚を促すとともに、今回携わった警察・自衛隊相互の関係各所に確かな絆を築き、笑顔のままに終了した。





# 曹友会(秋田・岩手) 家族間交流



## 曹友の夏

秋田駐屯地曹友会（曹友会長 畠山曹長）は、令和元年7月13日、秋田市桂浜海水浴場において、曹友会（秋田・岩手）家族間交流（バーベキュー会）を主催した。

本行事は、秋田・岩手両駐屯地曹友会の交流も兼ねて、相互に企画・主催する事業で、今回は秋田主催により、地元海水浴場にて「バーベキュー会」「子供スイカ割り」「流しそうめん」を実施した。

スイカ割りでは、目隠しした子供たちが、周囲の声に誘導されながら、バットや木刀でスイカを一刀両断。時折あらぬ方向に歩き出すと、周りから歓声が上がった。最後に本部管理中隊の田村2曹が挑戦すると、同僚や子供たちに、わざと違う方向に誘導され、力いっぱい砂浜を叩き伏せた姿に、周囲の笑顔は最高潮に達した。

今年度より初挑戦となった流しそうめんは、水流の速さに四苦八苦しながらも、参加者は美味しそうに堪能していた。その中でも年長の子供たちは、上手く掬うことの出来ない年少の子供たちを巧みに誘導して食べさせ、周囲の大人たちにやさしいひと時を見せていた。

照りつける暑さに、玉の汗をかきながらも楽しんだ一日は、家族間の交流及び、参加者の大切な思い出となり、大成功を収めた。





# 第4次野営訓練



## 暗闇と風雨を克服して

第21普通科連隊（連隊長 荒巻 1佐）は、令和元年7月14日から19日までの間、岩手山演習場において第4次野営訓練を実施し、併せて令和元年度連隊総合戦闘射撃競技会を行った。

競技会の実施に先立って、練成射撃の基盤を付与された各中隊は、部隊の射撃能力の向上に努める他、第9施設大隊の支援を受け軽掩蓋掩体の構築訓練を行った。戦闘射撃では隊員相互の連携を深め部隊行動の練度を向上させた。迫撃砲における夜間射撃では、暗闇に神経を研ぎ澄ませ、いかなる状況であっても平素の訓練と同じ行動が出来るよう練成を繰り返した。

その後18日より、特科大隊に支援された戦車1コ小隊を含む増強普通科中隊として総合戦闘射撃競技会に臨んだ。

本競技会は、小銃小隊・迫撃砲小隊の実力を競うものであるが、第9特科大隊の火砲及び第9戦車大隊の戦車の支援を受けて、有機的に結合した諸職種共同作戦の練成を兼ねて行われた。そのため、より実戦的な状況下において競技会が実施され、その中で、各々がその実力を遺憾なく発揮できた。

迫撃砲小隊は第4中隊が、小銃小隊は第3中隊がそれぞれ第1位となり、総合成績では第3中隊が栄光を勝ちとった。





# インターンシップ



## 自衛隊を夢見て

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、7月23日から25日の間、自衛隊秋田地方協力本部の依頼を受け、秋田県内高校生に対するインターンシップを支援した。

インターンシップに参加した県内高校26校74名（男子61名、女子13名）は、若干の不安と好奇心に満ちた表情で駐屯地の門をくぐった。

初日は、職場体験の全般説明を受けたのち、6個班に分かれ、班長達と一緒に懇談した。和気藹々と交流を深めた後、装備品展示・軽装甲機動車の車両試乗、ロープ訓練体験を行った。ロープ訓練では実際にロープを使い、戸惑いながらも一人ひとりが真剣な眼差しで臨んでいた。

2日目は、地図の見方を学び、地図上の座標の取り方や、等高線の見方を学んだ。午後は海上自衛隊第5航空隊のパイロット隊員からの航空学生採用制度の説明を受け、その一言一句に目を見開いていた。

3日目は、天幕展張訓練及び救急法を体験した。偽装網展張や野外ベッドの組み立てと、本格的な自衛官の宿営準備に、興味津々で取り組んだ。衛生小隊の隊員達により行われた救急法に関する体験では、皆真剣に耳を傾け、一生懸命に心肺蘇生法を実施した。

インターンシップを終えた学生は、いつのまにか、緊張もほぐれた様子で、学校の枠を超えた友情を築き、より自衛隊への理解をより深め秋田駐屯地を後にした。





# インターンシップ における1コマ



## 在りし日の邂

第21普通科連隊（連隊長 荒巻1佐）は、7月23日から25日の間、自衛隊秋田地方協力本部の依頼を受け、秋田県内高校生に対するインターンシップを支援した。その中で人の絆が生んだ、ひと時のやさしい時間を紹介したい。

それは3日目に行われた天幕展張体験の休憩中の1コマである。卒業後は是非陸上自衛隊に入隊したいと話していた女子高生と広報陸曹が会話していると、「とても親しい先輩が今年入隊しました」という話題になった。よく聞けば、その先輩は天幕展張体験の反対側で迫撃砲操作を練成している教育隊の中にいると判明した。どうにか会わせてやりたいと、教育隊の方々にその旨を説明すると、快く再会の時間を作ってくれた。

広報陸曹に連れられた彼女は、教育隊に近づくと、件の先輩を見つけた瞬間に走り出した。僅か4ヶ月、されど4ヵ月。大人たちよりも遥かに緩やかな時の流れの中にいる彼女たちにとって、4ヶ月という時間は万感の思いを爆発させるには十分な時間であった。思わず泣き出す後輩を笑顔で抱きしめる先輩の姿には、皆が心を打たれていた。その後、教育隊の配慮により、操作訓練を見学させて貰えることになり、代表して展示するのはもちろん先輩の役目となった。大好きな後輩の前で、緊張と高揚が複雑に混ざり合った彼女は、手の震えを抑えつつ一生懸命に迫撃砲を操作した。

その後は再びそれぞれの訓練と見学に復帰したが、ともに素敵な笑顔で戻っていった。

インターンシップから生まれた、偶然のひと時は、一組の先輩後輩とそれを見守る多くの人たちの心に忘れえぬ暖かい思い出を残した。





# 中学生を対象とした 生活体験



## 夏の思い出

秋田駐屯地（司令 荒巻1佐）は、7月26日、秋田県内の中学生を対象とした生活体験を実施した。

記録的猛暑の中、県内から集まった15名（男子14名、女子1名）の中学生達は、好奇心に満ちた笑顔で駐屯地の門をくぐった。

始めに広報室長よりブリーフィングを受け、その後一日を共にする班長を中心にして車座で懇談。早速仲間たちと打ち解けて、和やかなムードのまま各課目に進んだ。

午前中は、軽装甲機動車の試乗及び自衛隊で活躍する様々な車両の展示見学。隊員食堂で昼食を終えると、午後には、救急法訓練と信号らっばを体験。中学生達は、特に様々な救命救護法に興味を持ち、班長達を驚かせるほど終始盛り上がっていた。

体験の最後に感想を求めると、皆一様に「（自衛隊に対する）イメージが変わりました」と語った。生活体験参加前は、メディア等を通して自分たちが想像していた『厳格』『厳しい』といったものが強かったようだが、お互いに一人の人間として触れ合うことにより、『やさしい』『親しみやすい』といった声が多くの子から聞こえた。中には3年連続で参加した学生もいて、3年に渡る生活体験の思い出を語り、「毎年来ても飽きずに楽しめます」と感謝を述べ、生活体験を計画した広報室の要員たちはその言葉に感動をかみ締めていた。

わずか一日の体験ではあったが、参加した中学生と自衛官たちは、忘れられない大切なひと時を過ごし、いつか訪れるかもしれない再会の時に思いを馳せ、生活体験は笑顔のままに幕を閉じた。



# 中学生を対象とした 生活体験





# 隊員家族支援協定書の締結



## 秋田県内における隊員家族支援協定書を締結

秋田駐屯地（司令 荒巻1陸佐）は7月30日、秋田駐屯地会議室において自衛隊秋田地方協力本部（本部長 大久保1空佐）、秋田県自衛隊家族会（会長 北林康司氏）及び秋田県隊友会（会長 高橋良一氏）との間で「秋田県における隊員家族の支援に対する協力に関する協定書」を締結した。

同協定により、大規模災害等発生時に隊員が後顧の憂い無く災害派遣の任務にまい進できるとともに隊員家族の不安解消の一助となる環境が整備された。

今後は、より実効性のある家族支援となるよう会同や訓練を実施するとともに、県内の航空自衛隊を含めた協定書の締結を進めていく。





# 連隊長着任式



志をともに

第21普通科連隊は、令和元年8月1日、第31代連隊長として、五十嵐雅康1等陸佐をお迎えした。

1日朝、連隊長の登庁を知らせる、警衛司令の捧げ銃の号令が駐屯地に響き渡る。表門から発せられた号令は駐屯地に響き渡り、新たな指揮官を心待ちにしている隊員たちの心を引き締めた。

その後着任式は、立会官の第9師団長 岩村陸将の臨場を持って開始された。岩村師団長は五十嵐連隊長を「最も信頼する自衛官」と紹介し、「連隊長を核心とし、国民の負託に答え、国宝師団の継承者として、更なる強靱な連隊の創造を要望する」と述べられ、五十嵐連隊長及び連隊各隊員を激励した。

五十嵐連隊長は着任連隊長の訓示において「プロフェッショナル戦士たれ」と要望された。プロフェッショナルとは「求められる結果を出せる確かな実力を持ち、更なる高みを目指して日々努力していく者たち」であるとし、「この瞬間から隊員諸官と共に笑い、共に汗を流し、共に更なる高みを目指し、共に日々努力していくことを誓う」と述べ、連隊への思いのたけを熱く語った。

21連隊は新たな指揮官を擁し、更なる躍進の時代へと一步を踏み出した。





# 秋田竿燈まつり



## 燃え上がる夜

秋田駐屯地（司令 五十嵐 1 佐）は、令和元年 8 月 3 日から 6 日までの間、秋田竿燈まつりに参加した。

竿燈は、250 年以上の歴史を持つ国指定重要無形民俗文化財であり、毎年 8 月 3 日から 6 日までの 4 日間、「竿燈大通り」を会場に行われている。

昭和 45 年から参加を続けている秋田駐屯地竿燈部（部長 潮屋 1 尉）（以下：竿燈部）は、課業外及び休日を活用して練成を重ね、待ちに待った本番に臨んだ。特に今年は創部 50 年を迎える記念すべき年でもあり、部員たちは並々ならぬ熱意を持って祭りへと臨んだ。

午後 7 時、笛の合図が響き渡る。黄昏時の空を稲穂が埋め尽くすかの如く、約 280 本の竿燈が一斉に立ち上がって「竿燈大通り」を覆った。一瞬で色めき立った竿燈大通りは、囃子の勇壮な「竿燈囃子」に合わせ、差し手が「竿燈妙技」を次々に披露し、熱気は最高潮になる。竿燈妙技は「力四分・技六分」といわれ、体格に関係なく、様々な町内で卓越した妙技が披露された。

演技場所を交代で移動する中、竿燈部が訪れると、観客はより大きな歓声を上げた。陸上自衛隊の中型トラックをベースに飾り立てられている竿燈部の屋台は他の屋台に比べ一回り大きく迫力がある為、竿燈の大きさとも相まって、より壮大な演技となり、観客を魅了して止まなかった。

演技終了後は、観客とのふれあい時間が設けられ、特に中型トラックをベースとした自衛隊の屋台の周りには多くの観客が集まり、囃子班の横笛に合わせて太鼓を叩く体験をしたり、自衛隊の屋台や竿燈を背景に記念撮影をするなどし、そのひと時を楽しんだ。多くの観客で賑い、秋田の夜を魅了した 4 日間は、大盛況で幕を閉じた。





# 令和元年度師団訓練検閲



## 険しき森を乗り越えて

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1佐）は、令和元年8月26日から9月9日の間、王城寺原演習場において、第9師団隷下の各職種部隊の配属を受け、第21戦闘団として令和元年度師団訓練検閲を受閲した。

本検閲は、訓練練度の評価を受けるとともに、今後の練成訓練の進歩向上の資を得ることを目的とし、実施された。

連隊は『防勢的な作戦における行動』を受閲課目として付与され、五十嵐連隊長は本作戦を「オペレーション・フォレスト・プレデター（森の捕食者作戦）」と命名し、戦闘団各隊員に作戦に臨む意識の統一を図るとともに、臨機応変な作戦行動の重要性を説き、多様に変化する状況に応じ作戦を変更する必要性を徹底した。

前進開始までの間は作戦準備期間として、各種是正訓練や隊容検査等を行い、万全の態勢を整え車両行進に備えた。

1日早朝、王城寺原演習場へと前進すると、各部隊は、各々の定められた地域において、速やかに安全化を終え、偽装を徹底し防御陣地の工事を開始した。

動きを阻む雨と水分を奪う晴天が繰り返す中、配属された各部隊と連携しながら、昼夜を問わず築城（工事）と警戒を続け、5日正午から開始された敵の攻撃を退け、六夜七日に渡る防御作戦を完遂した。

特に戦闘団本部を含めた各部隊は、長い防御準備間を最大限に活用し、軽掩蓋化された指揮所を開設し、重厚な防御戦闘を可能とした。

9日には、検閲科目の1つとして、立姿及び背のう依託の射撃を実施。姿勢や肘の置き方等、各々が創意工夫を凝らし臨んでいた。

講評において統裁官の岩村師団長は「タイトな日程の中で練成してきた結果が今回の検閲に十分発揮されていた」と述べ、受閲部隊を労った。

連隊のすべてを惜しみなく発揮した本検閲は、部隊及び個人に大きな経験値と更なる自信を獲得させ終了した。





# 100kmマラソン支援



## 100キロチャレンジマラソンを支援

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐1佐）は、9月21日から23日の間、2019北緯40°秋田内陸リゾートカップ（第29回）100キロチャレンジマラソン（以下100キロマラソン）を支援した。大会支援は重迫撃砲中隊長（森1尉）を担当官とし、13名の支援隊を編成して行われた。

今年で29回目を数える本大会は、100km及び50kmの両部門が実施され、全国から1426名のランナーが参加し、険しい頂に挑戦した。100km部門は22日午前4時30分に仙北市角館を、50km部門は午前10時30分に北秋田市比立内を、それぞれスタートし北秋田市鷹巣のゴールを目指した。

小雨が降りしきる中、支援隊は、午前1時30分から出発する選手たちに先駆けて給水所の設営を開始した。その後は、大会実行委員と密接に連携を保ち、給水所の運営及び衛生隊員による救護を担当し、遠きゴールへと果敢に挑戦するランナー達に声援を送りながら支援任務を完遂した。

迷彩服に身を包み、大会の安全確実な実施を完遂するため献身する自衛官の姿は、選手のみならず、多くのボランティアや応援者たちの目にも止まり、支援する隊員たちへの労いの言葉も多く頂いた。

大会は大きな事故も無く実施され、自衛隊と地域との連携を確かなものとし、大勢の笑顔につつまれ終了した。



# 秋田県(陸・海・空) 自衛隊殉職隊員追悼式



## 礎の上に

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、9月14日、駐屯地慰霊碑前において「令和元年度秋田県（陸・海・空）自衛隊殉職隊員追悼式」を執り行った。

晴天に恵まれることが多い秋田駐屯地の追悼式は、本年も澄み渡る秋空に恵まれ、十九柱の御霊と参列した者たちの心を安んじる天候となった。式には、ご遺族をはじめ、秋田県、秋田市、各関係機関及び自衛隊協力団体等からの来賓のほか、秋田県所在部隊長、駐屯各部隊長及び隊員が参列した。

五十嵐司令は、「殉職された皆様の尊い志を受け継ぎ、貴重な教訓を活かし、国家防衛という崇高な使命を果たすべく、精強な自衛隊の育成に邁進しますことを、ここに改めてお誓い申し上げます」と追悼の辞を述べた。引き続き、来賓を代表し、秋田県知事代理 総務部危機管理課の渡辺正人氏及び秋田県防衛協会 中泉松之助会長から追悼の言葉、秋田吟詠会鈴木岳順会長の追悼和歌朗詠に引き続き、秋田駐屯地音楽隊による「慰安する」の吹奏での献花、儀仗隊（浦嶋3尉以下13名）による拝礼・弔銃をもって、十九柱の御霊をお慰めし、追悼式を終了した。





# 千秋花火支援



## ワールド・ワイド・パレード

秋田駐屯地（司令 五十嵐 1佐）は、令和元年9月14日、秋田駅周辺で行われた『第5回 千秋花火』に協力した。

秋田の繁栄の象徴である秋田駅前及び千秋公園において、秋田を盛り上げるため、平成15年より『あきた元気倶楽部』により生まれた地域おこしイベント千秋花火。秋田駐屯地は一昨年の第3回大会より参加し、本年度は、『はたらく車展』及び『元気パレード』、『地元歌手たちとのコラボ演奏』に参加した。パレードには秋田・岩手両駐屯地音楽隊の合同チームによるマーチング及び軽装甲機動車（通称LAV）1両、オートバイ2両がパレードに参加した。特に今年は、企画本部の念願であったディズニーとのコラボレーションが実現し、自衛隊車両と音楽隊のマーチングに引き続き、ミッキーマウスを始めとした人気キャラクターたちがパレードを行い、観客は珍しいコラボレーションに例年に無く盛り上がった。

その後、日も暮れた頃になると色とりどりの花火が夜空を飾り、フィナーレには、音楽隊合同チームが演奏する秋田県民歌にあわせて観客も歌い、盛大なクライマックスを迎えた。

約5万4千人が訪れた千秋花火。県内の各学校や多種多様な職業の人々が、一致団結して趣向を凝らした企画を実施し、年齢や立場を超越した一体感をかもし出し、夜空に大輪の花を咲かせた。今や秋田竿燈まつりに迫る勢いで名を馳せる本行事は、県内外の観客に素敵な夏の思い出を残し、盛大に幕を閉じた。





# 第31回秋田駐屯地司令杯争奪 バレーボール大会



秋田駐屯地劇場

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、11月24日、第31回秋田駐屯地司令杯争奪バレーボール大会を開催した。

本大会は、平成元年に駐屯地体育館が完成した折、こけら落とし行事として秋田県ママさんバレーボール連盟の協力の元、開催されて以来、31回を数える伝統ある大会である。

開会式において大会会長の五十嵐司令は「練習の成果を十分発揮し、ベストを尽くして頂くと共に、（今年最後の試合のため）玉納めとして、令和元年となるこの一年を思い起こしつつ、本大会を楽しんで頂けたらと思います」と選手の方々を激励すると共に、本大会に協賛・参加して下さった方々に感謝を述べ開催を祝った。その後、昨年優勝チームの『秋田あすか』から優勝旗及び優勝カップの返納が行われ、五十嵐司令の始球式を経て、全8チームによるトーナメントが始まった。

決勝は、『秋田あすか』と『秋田あすかドリーム』の対決となり、両チーム互いに鼓舞し合いながら、最終セットの最後まで1点を奪い合う接戦となった。結果、僅差で『秋田あすか』が優勝し連覇を達成した。試合後、準優勝の秋田あすかドリーム監督が教えてくださった。「『秋田あすか』はかつて有志が集まって結成されました。年月が経ち、若手選手たちがチームの主軸となる中、創立メンバーの私たちがシニア大会出場を主とした『秋田あすかドリーム』を結成し、時には今回のように一般大会にも若手を3名加えて参加している」とのこと。両チームは姉妹チームとして合同で毎週汗を流しており、今大会では決勝戦で相まみえた。それはまさに『平成』から『令和』へとバトンタッチした改元を象徴するような対決であった。仲間同士が互いに切磋琢磨し、試合中も成長し競い合う姿は、自衛隊の平素の訓練を髣髴とさせた。五十嵐司令以下居合わせた隊員たちは、まるで自分たちが参加しているような錯覚の中、手に汗握りながら、両チームに声援を送って応援を始め、決勝点が決まった際は体育館の天井を突き破るような歓声が上がった。

熱戦を極めた大会は、地域との交流を果たし確かな信頼を築き上げ、盛大に幕を閉じた。



# 第31回秋田駐屯地司令杯争奪 バレーボール大会





# 第32回秋田自衛隊音楽まつり



## 冬の調べと風物詩

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐 1 佐）は秋田県防衛協会とともに、12月1日、秋田市文化会館において第32回秋田自衛隊音楽まつりを開催した。

約千人の来場者をお迎えした本公演は3部構成となっており、第1部は第9音楽隊の単独演奏、第2部は岩手駐屯地音楽隊と秋田駐屯地音楽隊及びラッパ隊による合同演奏、第3部は全音楽隊による合同演奏を行った。

約2時間の公演では、自衛隊の定番でもある各種行進曲、映画やスポーツなどの人気曲、そして27曲にも及んだ平成大ヒットメドレー等、多岐にわたるジャンルで聴衆を魅了した。

多くの楽曲の中でも、最も歓声を受けたのは、「らっぱメドレー 2019『令和元年』」であった。重迫撃砲中隊 今3曹が、音楽まつりの為に編曲した信号ラッパとヒットソングメドレーの一大コラボレーションは、会場を熱気の渦に巻き込んだ。らっぱメドレーの開始がアナウンスされると「これを楽しみにしていた」「これが最高なんだ」とつぶやく声も聞こえ、本公演の名物として地域の皆さんに愛されている様子が伺えた。

フィナーレでは秋田県民歌が演奏され、舞台と客席が一体となって歌い、県民歌を特に愛する秋田県ならではの盛り上がりを見せ、大団円を迎えた。





# 第32回秋田自衛隊音楽まつり





# 令和元年度 秋田駐屯地年忘れ行事



仕事納め 笑い納め 楽しみ納め

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、12月19日、駐屯地内において、令和元年度秋田駐屯地年忘れ行事を実施した。

本行事は、年末年始休暇前に、各隊員の1年の労をねぎらうとともに、駐屯地家族の日として部隊と家族のより一層の親睦を図るために行われている。

午前中は、各中隊が廊下等で餅つきを実施。新年用の鏡餅と、昼食の雑煮用の餅を作った。駐屯地司令が各中隊を回りながら餅をつき、令和2年の目標を聞いて回ると、『陸曹候補生試験合格』や『結婚したい』等、各隊員、真摯な思いを熱く語っていた。

自分たちのついた餅に舌鼓を打った後、午後は、体育館において、多くの隊員と隊員家族が床を埋め尽くす中、演芸会と抽選会が行われた。

秋田県で活躍する有名人の方々による司会の下、演芸会は開演し、毎年恒例となった航空自衛隊第33警戒隊による大迫力のなまはげ太鼓が年忘れ行事の先陣を務めた。

そして秋田を代表するミュージシャンや芸人の方々がステージを盛り上げ、特にYummiさんたちのミニライブでは、隊員をステージに呼びこみ、体育館が一体となって大盛況となった。

最後は、参加された皆さんとともに抽選会が行われ、当選者の名前が読み上げられる度に歓声が巻き起こった。終始歓声に包まれた本行事は、多くの笑顔に包まれて大盛況のままに終了した。



# 令和元年度 秋田駐屯地年忘れ行事





# 令和2年訓練始め行事



## 新年を祝う

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1佐）は、1月9日、秋田駐屯地において、令和2年訓練始め行事を実施した。

連隊は、令和2年における訓練の無事と成功及び任務完遂を祈願するとともに、連隊の士気の高揚を図るため、訓練始め行事を行った。各中隊から選ばれた年男・年女の代表たちが新年の抱負を述べ、連隊歌斉唱の際は音頭をとって連隊を鼓舞し、新年を祝った。

その後、6個中隊による中隊対抗騎馬戦を実施。1騎4名で構成された騎馬が各中隊12騎編成され、血気盛んな72騎が、所狭しと体育館を駆け巡った。勝敗は大将の旗を奪取するか、制限時間内により多くの旗を奪取することにより決するため、各中隊様々な戦略や戦術を駆使して競い合った。

熱戦の末、優勝の栄誉を掴んだのは、第2中隊であった。巧みな戦術を駆使して決勝まで勝ち上がってきた第4中隊に対し、第2中隊は一気呵成に押し込み、戦術発揮の暇を与えず、高速機動と集中突撃による運用で、接戦を制した。

また、本部管理中隊は、女性自衛官のみの騎馬を編成し、各中隊の度肝を抜いた。中隊としては惜しくも1回戦で敗れたが、荒々しく男騎馬がぶつかり合う中、単騎で遊撃する様はまるで「オルレアンの聖女（ジャンヌ・ダルク）」を彷彿とさせ、大会一の称賛を浴びた。

その後連隊は、五十嵐連隊長の音頭の下、天井を震わすほどの勝ち鬨を上げ、新年の始まりを意気軒昂に彩った。



# 令和2年訓練始め行事





# 令和2年駐屯地成人式



## 令和の新星

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、1月10日、駐屯地体育館において令和2年駐屯地成人式を挙行した。

秋田県防衛協会中泉会長をはじめ、多くのご来賓の方々と駐屯地各部隊長・隊員が見守るなか、成人を迎えた55名は、新成人としての自覚と責任を胸に式に臨んだ。

執行者（駐屯地司令 五十嵐1佐）は、「成人になれば一人の大人として認められる一方、社会に対して責任ある行動が求められます。成人の日をここ秋田駐屯地で同僚とともに迎えたということをお忘れず、自衛官としての誇りを胸に修養に励み、立派な社会人・自衛官として、真に自立し逞しく人生を歩んでいくことを期待します」と式辞を述べた。

第1中隊 木内士長は「成人として自覚を深め自ら研鑽に励むとともに、国を守るという崇高な使命を持った自衛官として、成人を迎えたことを誇りに思い、国民・県民から信頼を得られるよう、日々努力していきます」と力強く新成人を代表して決意を表明した。

式典後、取材に訪れていた報道関係者からインタビューを受けた本部管理中隊 眞壁士長は「責任ある行動を心掛け、国民から信頼され、後輩の見本となるような立派な自衛官を目指します」と思いを語った。

令和を迎え、新たな時代の始まりに成人の門出を迎えた隊員たちは、ひと際引き締まった表情で、未来への一步を踏み出した。



# 令和2年駐屯地成人式





# 令和元年 連隊冬季戦技競技会



## 風雪を突き破る

第21普通科連隊（連隊長：五十嵐1佐）は2月5日～7日までの間、岩手山演習場において令和元年連隊冬季戦技競技会を実施した。

連隊は、部隊・隊員の冬季戦技能力の向上を図るとともに、師団冬季戦技競技会優勝を目的として、師団競技会準拠のコースを走破した。

本競技会最大の特徴は、レース途中での射撃である。激動から一転して脈を沈めての射撃を完遂するため、各部隊・各隊員が様々な試行錯誤を実施して臨んでいた。多様性に富んだ銃の保持要領や射撃への転化行動等は隊員相互に学ぶ面が多く、選手から応援者へ至るまで、すべての隊員が来たる師団競技会へ向け、飽くなき探求心を発揮して参加していた。

全員が己の限界をせめぎあっている中において最も目を引いたのは、風雪に立ち向かい前進する重迫撃砲中隊の女性隊員 木村士長である。それは、むせ上がる熱気と吹きすさぶ寒気の狭間で、髪を凍らせながら進む姿であった。凍てつく毛先はこの出走グループの時間帯が如何に寒く吹雪いていたかを語り、その毛先に溶け出して固まった雪の量を考えれば、どれだけ懸命にここまで走ってきたかを雄弁に語っていた。

結果は熱戦の末に3秒差で第2中隊が優勝した。わずかに及ばなかった他部隊の選手たちも成長を確かなものとし、本競技会を終了した。



# 令和元年 連隊冬季戦技競技会





# 秋田県・藤里町 冬期防災訓練



## 互いに手を取り合う

第21普通科連隊（連隊長 五十嵐 1佐）は、2月16日、第2中隊（中隊長 間瀬田 3佐）の隊員15名をもって、秋田県藤里町で実施された「秋田県・藤里町冬期防災訓練」に参加した。

本訓練は、大雪警報に伴い警戒態勢を高めている中、藤里町藤琴地区を震源とする震度6強の直下型地震により、地震動や雪の重さなどによる家屋の倒壊、道路の損傷、雪崩、火災等が多数発生した状況を想定して行われた。

また、警察・消防関係者、各地域の代表者及び連隊長が研修に参加した。当初、屋内において対策本部運営訓練を見たのち、シェイクアウト訓練に参加し、引き続き屋外で各機関の合同訓練を見学した。

連隊は道路啓開訓練、現地合同調整所設置訓練、雪崩遭難者捜索・救助訓練、孤立集落対策・救助訓練に参加した。本訓練は、単独での訓練はなく合同訓練のため、常に複数の機関が共同連携することが求められた。その為、誰しものが声を出し合い、勝手の違う他の機関と積極的に連携を密にした。火災及び雪による道路閉塞の状況では消防車及びパトカーと、雪崩による遭難者救助には、DMAT（災害派遣医療チーム）及び各救助隊と、孤立集落への物資輸送では現地の商店とそれぞれ協同し、災害時のシミュレーションを行った。その他、現地合同調整所では各機関所有のドローンによる空撮訓練も行った。

各地で防災意識が高まる中、各状況に応じて任務を淡々と遂行する隊員の姿は、テレビのニュースや新聞等で紹介され、多くの県民に安心感・信頼感を与えることができた。



# 秋田県・藤里町 冬期防災訓練





# アナウンス要員等集合訓練



## 笑顔から紡がれる声

秋田駐屯地（司令 五十嵐 1佐）は、2月25日秋田駐屯地においてアナウンス要員等集合訓練を実施した。

本訓練は、各種行事における司会等のアナウンス要員を育成することを目的として実施されており、部外講師としてフリーアナウンサー綿引かおるさんを招請し行われた。綿引さんは秋田駐屯地音楽まつりにおける司会等でもご協力頂いているご縁から、駐屯地ひいては自衛隊へのご理解も深く、受講開始の際は自衛隊用語の正しい文節を教えてほしいと語り、時折受講した隊員たちと議論を交わす場面もあった。

講義は基礎的な知識や技術の学科教育を受けた後、発声練習から始まった。特にアナウンスを行う上での表情や笑顔の作り方については細かく指導され、鏡を見て四苦八苦しなながら表情筋の正しい動かし方と自然な笑顔の作り方を学んだ。後半は簡単なPR文やアナウンス原稿を用いた実習が行われ、発表の様子をビデオに撮影し、最後にそれを見ながら全員で検証した。自分が映る動画を改めて検証することに、いささか恥ずかしさを見せてはいたが、皆真剣に自分の発表を分析していた。

全てのカリキュラムを終了した頃には、参加隊員が長所を伸ばしたり短所を克服したりと、講師の綿引さんも驚くほどの成長を見せていた。今後、この訓練を完遂した隊員たちの更なる活躍が期待される。



# アサウンス要員等集合訓練





# 献血協力



## バトンタッ血

秋田駐屯地（駐屯地司令 五十嵐1佐）は令和2年3月6日、秋田県赤十字血液センターに献血協力を実施した。

折しも啓蟄の訪れとともに献血バスが駐屯地を訪れると、我こそはと隊員が集まった。駐屯地には例年3～4回献血バスが訪れており、隊員による献血協力を実施している。献血を行う隊員は、血圧等の健康状態の確認から始まり、血液検査を経て献血に臨む。そして献血による脱水予防等のため飲み物が提供され（衛生上持込等が制限されることもあるため）、水分補給しながらの献血となる。

参加した隊員たちは様々な思いをもって参加していた。特に今回初めて参加した隊員たちは、献血後の脱水症状による事故防止等の注意事項や献血事業の内容について説明を受けると、血液を提供するという行為の背景にあった、人々の思いや献身に感銘を受けていた。

新型コロナウイルス流行の影響もあり、全国的に献血不足が騒がれる中、少しでも貢献しようと、隊員たちはこぞって訪れて、命を繋ぐリレーの輪に加わった。

